

古田靈能探偵事務所

古田新田郎 .. 靈能探偵、クズ。

桐島灯火 .. 事務員、毒舌。

小岩 .. 依頼人その1

町田 .. 依頼人の紹介者

古田 「さて、開幕早々この探偵事務所最大の危機を迎えたわけだが。」

桐島 「毎月の事ですが。」

古田 「迎えたわけだが！」

桐島 「はあ。」

古田 「依頼が無さすぎて金がない。」

桐島 「知つてます。」

古田 「このままだと明日の飯代もない。」

桐島 「(ゞ)愁傷様です。」

古田 「もちろん君の給料もない。」

桐島 「ふざけんなよクソ野郎。」

古田 「あんまり強い言葉使わないで、泣いちやうから。」

桐島 「いい歳したおっさんの涙とかマジできついのでやめてください。」

古田 「は、はい…」

桐島 「で？」

古田 「で？」

桐島 「どうするおつもりなんですか？」

古田 「どうしようかね。」

桐島 「確かに所長は生命保険入ってましたよね？」

古田 「今なんか怖いこと考えてない？」

桐島 「いえ、完全犯罪について考えているところです。」

古田 「完全にヤル気だね君。」

SE:玄関のチャイムの鳴る音

古田 「お、来客だ。助手よ、対応してくれたまえ。」

桐島「私は助手ではなく事務員なので職務外ですね、『自分でどうぞ。』」

古田「あ、はい。」

SE:ドアを開ける音

古田「はい、こちら古田霊能探偵事務所です。」

小岩「すみません、知人の紹介で伺ったのですが。」

古田「『ご依頼のお方ですね、奥へどうぞ。』」

小岩「失礼します。」

古田「こちらにお掛けください、今お茶を入れてきます。」

小岩「はい。」

SE:お茶を用意する音

SE:お茶を置く音

古田「では改めまして、こここの所長を務めている古田です。」

小岩「小岩と言います…あの、ここのこととは」

古田「町田さんの紹介ですね？」

小岩「な、なぜそれを？」

古田「一応霊能探偵ですので、ね。」

小岩「す、すごい。本当に靈能力つてあるんですね。」

桐島「詐欺師。」

小岩「ん？」

古田「コホン、それでどういった内容の『ご相談でしようか？』

小岩「その…こんなことを言って信じてもらえるかわかりませんが。」

古田「はい。」

小岩「ずっと、声が聞こえていました。」

古田「声？」

小岩「はい、最初は私の勘違いだらうと、たまたまそんな声が聴こえてきたんだと思っていました。」

古田「そうではなかつたと？」

小岩「はい、もう二週間もずっと聞こえてくるんです。」

古田「病院には行かれましたか？」

小岩「はい、耳にも脳にも異常はないと診断されました。」

古田 「一体どのような声が聴こえてくるんですか？うめき声？恨み言？」

小岩 「それがその、聴こえてくるのは悪口なんです。」

古田 「では小岩さんの話をまとめましょう。」

小岩 「お願いします。」

古田 「声が聴こえ始めたのは二週間ほど前、声は決まって小岩さんが一人になつたタイミングで聴こえてくる。」

小岩 「そうです。」

古田 「聴こえてくるのは小岩さんへの悪口、カメラやボイスレコーダーではその声を録音する」とはできなかつた。」

小岩 「はい、できませんでした。」

古田 「声は一種類ではなく小岩さんの知人友人家族など様々な声の悪口が聴こえてくる、間違いないですか？」

小岩 「間違いないです、一人の声の時もあれば複数人の声が聴こえてくることもあります。」

古田 「病院に行つても異常なし、と。」

小岩 「はい：一人になつたら悪口がずっと聞こえてきて、頭がおかしくなりそうで、それで藁にも縋る思いで町田さんに相談して」

古田 「ここに来た、ということですね。」

小岩 「ここならば不思議なことも何とかしてくれるので町田さんが。あんまりあてにしてなかつたんですけど。」

古田 「お任せください、こう見えても界隈じや凄腕で通つてるんですよ。」

小岩 「そ、それじゃあもう原因は分かつたんですか。」

古田 「もちろんですよ。」

小岩 「や、やっぱり私の悪口を言つている人たちの心の声が聞こえてているとかそういう？」

古田 「…なぜそう思われるんですか？」

小岩 「聴こえてくる声が知人ばかりだし、実際皆言つてそうな悪口ばかりなんですよ。」

古田 「悪口を言われている自覚があると？」

小岩 「私、人より目立つんで妬まれているんじやないかと。」

古田 「なるほどなるほど。」

小岩 「どうせ皆裏では言いたい放題に決まつてます。だからその声が私に聞こえてきてるんじやないかって。」

古田 「まあそういう事例が今までなかつたわけではないんですが。」

小岩 「それじやあ」

古田 「しかし、今回の件は別ですね。」

小岩 「別ですか？」

古田 「ええ、今回の件の原因はおそらく耳ではなく口にあるんですよ。」

小岩 「それはどういう…？」

古田 「さて、ここからは解決策の提示なのですが。」

小岩 「解決できるんですか？」

古田 「ええ、ですが完全解決となると少々お値段がかかってしまいまして。」

小岩 「あの、あんまりお金を多くは用意できないんですが。」

古田 「それならばお安いコースも用意できますよ。そちらをお試しいただいてからでも大丈夫です。」

小岩 「それでしたらそちらの方でお願いします。」

古田 「でしたら……これだけいただけますでしょうか？」

小岩 「思つたよりもお安いですね、こういうところつてもっとお金を取りられるイメージでした。」

古田 「ウチは良心でやらせていただいていますので。」

小岩 「それで、どうすればいいんですか？」

古田 「少々お待ちを。」

SE:足音が遠ざかっていく

小岩 「まつたく…なんで私がこんな胡散臭い所に相談しなきやいけないの…それもこれもあの人たちが…」

桐島 「コホン。」

小岩 「あっ……」

桐島 「……」

小岩 「あの……古田さんは本当に霊能力者なんですか？」

桐島 「私にはわかりかねますね、私にはそういう不思議な力はないもので。」

小岩 「じゃあなんでこんなところで働いているんですか？」

桐島 「それは…」

古田 「いやあおまたせしました。こちらをどうぞ。」

小岩 「これは…リップクリーム？」

古田 「ちょっと特殊な奴でして、これから毎朝こちらをお塗りください。」

小岩 「それで声が聞こえなくなるんですか？意味が分からないんですが。」

古田 「効果がみられないようでしたら代金はお返しますよ。」

小岩 「それなら…」

古田 「それからサービスでアドバイスを一つ。」

小岩 「なんですか？」

古田 「言葉を発する前によく考えてから発してください。」

小岩 「?」

古田 「はいそれではこちら請求書になります、お支払いは銀行振り込みまたは……」

※音声フェードアウト

桐島 「結局なんだつたんですか？アレ。」

古田 「小岩さん？」

桐島 「はい、耳の異変に対して対処は口、どういうつながりがあるんですか？」

古田 「まあ簡単コースだからね、とりあえずはあれで様子見だよ。」

桐島 「意味が分からぬですが。」

古田 「あれはね、本来耳でも口でもない異変なんだ。」

桐島 「わかりやすく簡潔にお願いします。」

古田 「はいはい、あれはね」

SE:扉の開く音

町田 「こんちはー！」

桐島 「お帰りはあちらです。」

町田 「ちよつ、酷くないですか！」

古田 「やあ町田君、相変わらず元気そうでなによりだ。」

町田 「古田さんも相変わらず胡散臭そうですねえ！」

古田 「そりだらうそりだらう。」

桐島 「誰も褒めてませんが。」

町田 「そして相変わらず塩つ塩の塩対応、桐島さんも元気そうで。」

桐島 「それで、ご用件は何ですか？お帰りはあちらです。」

町田 「めっちゃ帰らそうとしてくるじやん！折角依頼人紹介してあげたのに。」

古田 「おお、そうだったそうだった、町田君には毎度のことながら感謝しなくてはな。おかげで明日のご飯にありつけた。」

町田 「またそんな限界ギリギリの生活してるんですか？」

古田 「毎回なんとかなつてゐるからそれでいいのだ、それよりも」

SE：肩を叩く音

町田 「あれ？ また憑いてきました？」

古田 「いい加減そのお人よしを治した方がいいな君は。そんなんだから靈に憑かれる。」

町田 「そんなお人よしですかね？ 僕。」

古田 「無限に浮遊靈を引き付けるくらいにはな。」

桐島 「ではこちらお祓いの料金となります。」

町田 「ちよつ！ 勝手に祓つておいて料金発生するんすか？」

古田 「我々の生活、主に桐島君の給料がかかつてゐるんだ、許せ。」

桐島 「毎度ありがとうございます。」

古田 「と、言いたいところだが今日は特別にタダで良い。」

町田 「え？」

桐島 「正氣ですか？ 一回死にますか？」

町田 「あのクズの古田さんがお金を取りらないなんて…とり憑かれています？」

古田 「失礼だな君たちは、今回は町田君のお陰で稼げそうだからね。それで相殺ということです。」

（）

町田 「あれ？ もう解決したんじゃないんですか？ 小岩さんの件。」

古田 「解決していればそれに越したことはないんだがね。」

桐島 「微塵も思つてないことを。」

古田 「まああれじや解決しないだろうね。 そうだ、参考までに町田君、君から見て小岩さんはどういう人物だい？」

町田 「小岩さんですか…？ そうですねえ、よく人の悪口を言つてますね、AさんにはBさんの悪口を、BさんにはCさんの悪口を、といふ感じで。」

古田 「私の予想通りだな。」

町田 「因みに…のこともめっちゃ胡散臭いし貧乏くさいって言つてました。」

桐島 「事実ですね。」

町田 「桐島さんのことはクールぶつてる不愛想な男つて言つてました。」

古田 「事実だ。」

桐島 「は？」

古田 「スミマセン。」

町田 「でも古田さんだったらチャチャつとなんとかすると思つたんだけどなあ、僕の時みたいに。」

古田 「言つておくが町田君の時には割と命がけだつたんあだぞあれでも。」

町田 「え、そうなんですか？」

古田 「ちゃんと説明したと思うんだがね：まあいい。それで小岩さんの件だが」

町田 「うん。」

古田 「あれは私がどうこうするものじゃない、本人の問題という奴さ。」

SE：ドアを開ける音

小岩 「どういうことですか！」

古田 「いきなりご挨拶ですね、小岩さん。」

小岩 「ふざけないでください、この詐欺師！」

古田 「事情が呑み込めないんですが？」

小岩 「全然声が無くならないじやないですか、少しは減つたけど、ずっと頭の中で声が聞こえてくる。」

古田 「リップクリーム、効果ありませんでしたか？」

小岩 「貴方から高いお金で買ったコレ、唇にぬると凄く痛いだけなんですけど。」

古田 「痛い：ねえ。」

小岩 「何を笑つて！」

古田 「少しは声が減つたんですね？」

小岩 「そりや少し減りましたけど…今も全然聞こえます。」

古田 「なるほど、私のアドバイスは覚えていますか？」

小岩 「アドバイス？」

古田 「まあそうでしょうね。」

小岩 「どうにかしてください！もう限界です。声を減らせたんなら完全に消すこともできるんでしょう？」

古田 「できますけど、完全解決となるとそれなりの料金が発生しますよ？」

小岩 「それで声が消えなかつたらちゃんと全額返してもらえるんですか？」

古田 「ええ、もちろん全額お返しさせていただきます。」

小岩 「なら早く消してください！一時でも早く！」

古田 「では小岩さん、アナタはこれから一生他人の悪口を言わないのでください。」

小岩 「はい？なにを…」

古田 「アナタのソレは反響怨音と言いまして、他人の悪口を言う人間にとり憑く怪異です。」

小岩 「何を言つてるんですか？悪口？」

古田「他人の悪口を言う人間はね、心のどこかでこう思うんですよ、自分も悪口を言われて  
いるハズ、と。」

小岩「それは…」

古田「自分がこう思っているから他人もこう思っているハズ、自分もやっているのだから  
他人もやるハズ、自分が悪口を言っているんだから他人も言っているハズ。そういう  
心理にとり憑くのが反響怨音なんですよ。」

小岩「私が原因？そんな」

古田「アナタに聞こえた声はね？アナタが発した声が反響して聞こえてきた声なんですよ。」

小岩「私が、悪口を言つたから…」

古田「なのでアナタが悪口を言わなければ声は聞こえなくなるんですよ。」

小岩「私、他人の悪口なんて」

古田「リップクリーム。」

小岩「え？」

古田「あのリップクリームは唇に塗つて悪口を言うと痛むようになつてるんですよ。」

小岩「…」

古田「私としては、『自身で気づいてほしかったんですけど。』

小岩「悪口を…言わなければいいんですね？」

古田「ええ、自信がないならこのようなものも『用意できますが？』

小岩「チヨーカー？」

古田「他人の悪口を言うと首が絞まるチヨーカーです。」

小岩「い、いりません！そんな物騒な物。」

古田「そうですか、では『自身で頑張つてください。』

小岩「…はい。」

古田「それでは、こちら完全解決の請求書となります。もし『』れで解決しなかつたらまた  
いらしてください、全額お返ししますので。」

小岩「わかりました…その、お世話になりました。」

古田「はい、今後とも古田靈能探偵事務所をよろしくお願ひします。」

SE:扉の開く音

町田「こんにちはー！」

桐島「お帰りはあちらです。」

町田「今日もいい感じの塩対応だね？桐島さん。」

古田 「おお、町田君じゃないか？今日も憑いてるね。」

SE：肩を叩く音

町田 「ありがとう♪」ざいます！」

古田 「そういうえば小岩さんはあれからどうだい？」

町田 「そうですねえ：口数がめっちゃ減ったんですけど。」

古田 「ああ。」

町田 「前よりは人間関係が良好に見えますね。」

古田 「それは良かった。」

桐島 「ずっと疑問に思っていたんですが。」

古田 「ん？」

桐島 「どうして最初から解決策を教えなかつたんですか？」

古田 「そのことか、町田君はわかるかな？」

町田 「うーん…本人が気づかなければ駄目だったから、とかですか？」

古田 「正解だ、心の陰に自ら気付き、改善しないといけない怪異だったからね、自覚することが必要だつたんだよ。」

桐島 「そういうものですか？」

古田 「そういうものだよ。」

桐島 「本音は？」

古田 「お金いっぱいで嬉しいな。」

桐島 「クズ。」

町田 「あはは、やつぱりここを紹介して正解でしたね。それでは僕はこれで！」

SE：扉の閉じる音